天草酒造がお届けする
焼酎と天草の情報紙

け〜な

Volume. 4
2022.JAN

2022年1月号
発行：合名会社 天草酒造／発行人：平下 豊
Creative Direction, Design, Writing & Edit：小園勝之
撮影：野見山明子、外園あみ（天草酒造） illustration：吉川侑里

※『け〜な』は、天草の方言で「おいで」という意味

まちをみがく。会社をみがく。

あけまして おめでとうございます
本年もどうぞよろしくお願いいたします

この場が必要だったんです。東京で天草の良さを百回しゃべってもまあ伝わらない。だから「一回で良いから来てみてよ」って。実際、先ほども述べたように来て頂いた方は離れないんです。

――全然上がらなかった手が、半分以上手が上がるようになるには、どういう働きかけ・声かけでやるのでしょうか？

馬場市長：天草がどれだけ恵まれているのかということをお話しします。「天草で生きていけること」って、一番幸せじゃないですか！」と。これまでの仕事人生で沢山全国を回ってきましたが、天草の素晴らしいところは数え切れないほどあります。例えば島の大自然。山は美しく、海にはイルカが沢山いる。有明海・東シナ海・不知火海の3つの海から獲れる魚種は日本一を誇ります。高品質な器の素材である天草陶石がある。天草四郎に代表されるように歴史や文化も豊かです。でも天草から出たことの無い人は、そんな天草は、地元なので、素晴らしい物事への自覚が無いだけだったりするんです。

天草には人間が人間らしく生きていくのに必要なものが全てあります。今の天草にあるものをもっと磨いていったり、伝えていったりすることが出来れば、日本だけでなく世界からも羨望の眼差しで見られるような所になれると思う。そんなふうにお伝えしていますね。

『のさり』の精神

――天草の人って温かいと感じます。何故なんでしょう？

馬場市長：天草は歴史的に移住者が多いんです。どういう事かというと、島原・天草の乱があったときに、天草でもたくさんの犠牲者がでました。著しく人口が減り、天草島への移住政策が採られたんです。それで特に九州各県からの人口流入が一気にありました。そうしたこともあって、移住者どうし、つまり知らない人どうしても助け合う、というような光景が天草には多くあったのではと思うんです。あくまで私見ではあるのですが。また、一番多い時代、島内で20万人以上人口のあった頃には食糧不足もありましたが、そうした時にも人々は助け合い、これをしのぎました。これも、そんな背景があったからなのでは？と。こういうのが『のさり』だと思うんです。（天草弁で良いことも悪いことも含めて受け入れていこうということ）のさりには大らかさと優しさが含まれているかもしれませんね。

平下：のさり。確かにそうですね。あとはウチの場合いうと、おせっかいが過ぎる（笑）。知る人ぞ知る「アレ食わんねコレ食わんね攻撃」。足りないって状態が許されんとです（笑）。来客の中には1泊2日でおにぎりを24個食べた強者もいますよ。まあ、おもてなしが好きなのは間違いないんでしょうね。

昔のほうが焼酎はカンタンに売れたかもしれません。この20年くらいこんな感じでやってきて島外の方との交流も増えましたが、母達に聞くと、「今の方が色んな人とふれ合えて楽しい」と言っています。今お付き合いしているお客様も皆さん天草に来たことがある方ばかりです。私たちも「どのようにして焼酎を造っているかを知っていただきたい」と考えているので、大変ありがたい限りです。

仕事で来た営業さんにも「お昼食べて？」というのが天草酒造流。

――最後に市長にお伺いします。このKANPAI AMAKUSAや天草酒造に期待したいことは？

馬場市長：天草には豊かで魅力的な資源が沢山あります。でも、それらを伝えていくことがまだまだ苦手です。ですので、それを伝えていく『場』、天草のプラットフォームとでも言いましょうか。「ここに来れば天草の魅力、ぜんぶ分かります！」というような所になっていってほしいですね。

平下：そのためには、やはり魅力ある場と人づくりをしていかなければなりません。社員さんたちに言うんですが、「焼酎の」ことは、みんなが伝えて」と、自分で言うのは恥ずかしいので（笑）。その代わり「みんなの魅力を私が伝えるから」って。今後、農家の方たちが、料理人や飲食店関係者に食べ方を提案するマッチングイベントなども計画しています。

馬場市長：平下さんにはそうした『繋げる力』があると思っています。これって誰にでも出来る事ではない。観光って景色が良いとか食べものが美味しいとか、そこばかり宣伝されがちですけど、もっと深い所もあるのではないでしょうか。人と人とを結びける、とかですね。

平下：恐縮です。私たちにできることが色々あると考えていますので、挑戦あるのみです。市長、本日は貴重なお話しを本当にありがとうございました。

サウナと焼酎と私

vol.4 サウナde一人忘年会

平下 豊

一年あっという間。と、毎年言っているそこのアナタ。仲間です。「今年も早かったですね〜！」（そうですね〜！）はい、コールアンドレスポンスも良い感じですので、今号もサウナコラムよろしくお付き合いをば。

筆を執っている今は12月の半ば。ようやく焼酎の仕込みも全行程が無事に終わり、もの凄くゆっくりとサウナに入ることができる！（なんたる贅沢…）という訳で、今年一年の振り返りでもしようと今日もサウナに張り切って来ております。

しかし！しかしだ。お客さんが多い！ここは東京？んなことはない。もちろん、商売繁盛には言うことないし、私のサウナではないので文句を言える立場でもない。でも！でもだ。一つだけ言わせて欲しい。『み！ず！ふ！ろ！』いけない、取り乱してはいけない…。私も大人である。ちゃんと説明しよう。

昨今久しく続いているサウナブームからか、最近のサウナには20前後の大学生と思われる若者が多い。今日も彼らは軽自動車に乗れる分だけ乗って4人グループで来ているようだ。彼らときたら、湯船からサウナ、水風呂、なんなら身体を洗うまで4人で行う…。まさに恐るべしカルテットなのである…！しかしそのくせ、世代を反映してか分からないが、大事なところはずっと隠している。「若者よおじさんたちは隠さなかったぞ！」ん？別に威張ることではない？それもそうか。でも、これだけは言わせてくれ。「時間だけ決めて別行動をしようZE！？ 友達とサウナに入れる時間は違う筈だYO！」おっと、語尾がヘンになってしまった。もとい。4人で水風呂入られたらもうアウトだ。誰も入れない。彼女や友だちに向けているであろうその優しさを、おじさんやじいちゃんにも、ちょっとで良いから、分けてくれ！…閑話休題。今日はサウナに今年の振り返りをしに来たのだった。整えれば…。

2021年は激動の一年だった。だが順調な一年でもあった。昨年に続くコロナ渦により、依然さまざまな面での影響を受けつつではあるが、念願のKANPAI AMAKUSAをオープンする事ができた。それも手伝ってか色々な人達が天草に遊びに来てくれた。ありがたい限りである。良い感じに汗も出てきた。さらに整えるべく思索を進める。

私たち天草酒造は「焼酎を通して天草諸島の魅力を全国へ伝える」ということを大切にしている。焼酎とは、それくらいの事が出来うる魅力的なものなのだ。しかし、焼酎造りをこれから50年、100年と継続していくためには、地域を盛り上げる事は不可欠だ。「さて、次は何をやろうか？」よし、水風呂に移って思索タイムだ。

ふう。サウナから出たら1秒でも早く水風呂に入りたいものである。遅れれば遅れるほど鮮度が落ちる。生ビールも同じだ。例えば大人数で飲みに行った時、私は気が利くフリをして一番最後に生ビールを受け取る。何故ならそこが一番鮮度が良いからだ。あれ？水風呂で何かを考えようとしていたのだが…まあ良い。一先ず、水風呂である。

おや？と立ち止まる。さっきの学生達がキャキャ言いながら水風呂を占拠してるではないか！ぐぬぬ…。水風呂入りたい入りたい入りたい…。しかしだ。副業で番組をやっているのもあり、自分で言うのも何だが、小生地元ではちょっとしたスターである手前、文句も言えない。好感度は大事だ。声にならない「水風呂入りたい！」アピールを強烈にするも、察してくれない…。悲P。「そんな事で社会に出て通用すると思っているのか！」と心の中で小声でささやく私。

やむなし。気分を入れ替えて外気浴としよう。再び思索タイムだ。そうそう、脳内議題は「次は何をやろうか？」だったな。来年は今年蒔いた種を育てる年になりそうだ。新店舗 KANPAI AMAKUSAはもっと魅力的な場所にしていきたい。コロナも収束していけば、もっとたくさんの人が来てくれるに違いない。その時のために、店には天草の魅力をもっともっと詰め込んでいきたい。飲食店さんと生産者さんを結びつけるようなイベントも面白そうだ。天草島内には、非常にレベルの高い生産者さんが多いと思っているのだが、あまり評価されていないと感じる。そういった生産者さんはPRが不得手だったりする。要はもったいないと思うことが、度々あるのである。これをどうにかしたい！と考えている。

あと、自社栽培の農作物も一気に増やしていきたい。そして、いつか天草産の農産物だけで焼酎造りをやりたい。時間はかかるが大いに取り組む価値があることだ。よし、2022年やるべき事が見えてきた。

おや？ちょうど水風呂も空いたようだ。でも、もう外気浴ですっかりクールダウンもできたし、またサウナにでも…。という訳で、皆さんのご健康とご多幸を祈念しつつ、2022年も当サウナコラムと天草酒造を何とぞよろしくお願いいたします。

天草ん酒蔵ん人

※天草弁「〇〇ん」＝「〇〇の人」の意

#4 山口さん

趣味
家庭菜園

好きな焼酎
池の露

天草のおすすめ
仕みやすさ
（海がきれい！人付き合い）

――仕事内容を教えてください。

何でもやっています。米づくりと芋づくりといった農業にはじまり、芋の下処理など原材料の準備から、焼酎の造り、瓶詰め、ラベル貼り、箱詰めなど大体一通りですね。

――入社の経緯について教えてください。

入社して20年程になるでしょうか。早かですね。同僚の岩下さんからの紹介だったんです。もともと知り合いというか、親戚なので彼女とは、もうン十年のお付き合い（笑）。

――天草酒造のことは知っていたんですか？

それはもちろん。ですが、正直焼酎はあまり飲んだことが無かったんです。でも、入社することになってですがに飲んでみました。池の露を飲んだんですが、香りが印象的でした。今でもハッキリ覚えていますね。

――働いてみて、どうでしたか？

それまでは、食品の工場や、繊維の工場などで働いてきましたが、天草酒造は本当に和気あいあいとしています。はじめから居心地が良かったです。

――2021年5月には、KANPAI AMAKUSAが5月にオープンしました。この場所への思いなどお聞かせください。

やっぱり、お客様が沢山きてくれることが本当に嬉しいです。今までも私たちが作ったものでお客様が笑顔になるのを見ることはもちろんありましたが、それが『お店で』になることで一気に広がった。それが一番嬉しいですね。また、今は社長はじめ40代が元気よく蔵を引っ張っていってくれています。みんなで力を合わせて頑張っていってほしいです。

――天草酒造は、山口さんにとってどんな場所ですか？

人生で一番良いところです。みんな良くしてくれて楽しく働くことができています。

笑顔が印象的な山口さん。天草生まれ、天草育ちの生粋の天草人です。そんな山口さんが今年3月をもって退職。寂しくなります。

天草酒造でのお仕事を通して、たくさんの方にお世話になりました。本来でしたら皆さんお一人お一人にご挨拶差し上げたいところですが、この場を借りてご挨拶をさせてください。皆さん、本当にお世話になり、ありがとうございました。皆さんのご健康とご活躍を祈念しています。これからも天草酒造をよろしくお願いいたします。

幻の酵母

希少な湯島芋を使用してワンランク上の池の露としてご提供しております。池の露湯島。このプレミアムな湯島を、さらに特別な酵母で仕込んだのが、この。池の露 湯島 The Highest Yeast です。

熊本大学の酵母研究のパイオニア 谷教授が、永年の研究の末に作り上げた『分裂酵母』を使用。芋焼酎なのに、吟醸感のある味わいに仕上がりました。『吟醸感って、芋焼酎に必要？』と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません。そんな方にこそご賞味いただきたい。まさに芋と米のハイブリッドな一杯に仕上がりました。

すみません…2月発売に延びました
お詫びに、パッケージをチラ見せ…

新商品予告
池の露 湯島
The Highest Yeast
（芋／500ml）
○アルコール分：38度

け〜な Volume.4
2022年1月号（隔月刊／偶数月28日発行）

［次号予告（2月末発行予定）］
今後も新コンテンツ絶賛企画中！ご期待ください！

隔月刊（偶数月の28日に発行）

天草市長　馬場 昭治

1968年生まれ。熊本大学教育学部卒業。社会人経験を経て、衆議院議員公設第一秘書。2000年、合資会社馬場商店へ入社。2008年、ババ商店株式会社、株式会社天馬堂の代表取締役に。2017年、天草ケーブルネットワーク株式会社 代表取締役。2021年2月、天草市長に。

新春特別企画

馬場天草市長に訊く、天草と未来

学ぶ、変わる。動く、つながる。

新年あけましておめでとうございます。
2022年最初の『け～な』は特別企画！
馬場昭治 天草市長をKANPAI AMAKUSAにお迎えし、
弊蔵代表の平下が対談させていただきました。

農業、観光、まちづくりに会社づくり…
そして話は天草の未来に及んだところで、タイムアップ。
12月の冷えた日の午後に行ったインタビュー。
終了後は気温が高まったような、熱量ある濃い時間となりました。

聞き手／小園勝之

天草酒造 代表取締役　平下 豊

1977年、天草市新和町生まれ。東京農業大学卒業後、天草酒造へ。2014年、天草酒造代表に。新和グッドカンパニーズ代表。

——お二人はいつ頃からお知り合いだったのでしょうか？

平下：5年程前かと記憶しているのですが、市長が経営者だったころです。天草の企業として地域おこしの活動をされていたこともあり、一方的には存知あげていたのですが、実際に繋がったのは天草ケーブルネットワークさんのラジオでご縁をいただいてからですね。私たちも同時期に地域おこしの活動を行っていたこともあり、お声がけいただいたかと思います。

馬場市長：そうでしたね。また天草酒造の先代である平下さんのお父さんとはもっと先に、縁がありましたね。

——番組を担当していた平下さん含め3人(※)に「こうしてほしいなど、伝えたりされていたのでしょうか？

馬場市長：いえ、それが何一つ言ったことないんです(笑)。

平下：西郷隆盛的にというか、本当にお任せいただいていましたね。

馬場市長：3人ともおバカしてるようなんですけど、実はちゃんとしているんですよ。私も結構いじられていましたけど(笑)。

※「酒蔵」「バン屋」「旅館」なる天草のおじさん3人組。天草ケーブルネットワークで番組を担当。

——市長から見てどんな印象だったでしょうか。

馬場市長：3人とも勉強しているうきんなんですが、実は色んなことを知っていて、その裏には真剣にまちづくりをしていこうという意思がある。単に騒いでいるのでは決してないんですね(笑)。こういう人たちが、今後の天草を担っていくれたらと思って番組をやってもらおうと思いました。

平下：番組のスタッフさんたちはドキドキハラハラだったと思う。毎週の生放送2時間、好き勝手にしゃべり倒させてもらってましたから。3人とも好きなように生きていこうという考えで、裏表なく同じ事を言い続けていれば、付いてきてくれる人は付いてきてくれる。そういう思いなんです。

地域をつくらねば焼酎はつくれない

——なぜそのような考えに至ったのでしょうか？

平下：私は、35歳までは「世の中に出ていなかった」んです。それまでは本当に焼酎づくりしかしていなかった。当時、息子が小学校1～2年生だったんですが、私の生活は早朝から夕方まで仕事、夕方からは息子と一緒に野球の練習をして、一緒にお風呂に入って一飯を食べて…まるで一緒に遊ぶ兄弟・友だちと言うか、そんな日々でした。

その頃、だんだんと天草が疲弊していくのを感じていました。まちを歩く人も減っているし、天草の経済が衰退していくのを目の当たりにしながらも、「自分には関係ない」と考えていたんです。

ですが、ふと息子たちの未来を想像したとき、50年後もこの天草・新和町で焼酎づくりを続けていくためには、もう地域づくりからしなければならないと思い至ったんです。でないと会社の永続性は作れないと、本当にそう思いました。

すると不思議なもので行動が変わりました。大きくは2つ。まず「明日から天草人から誘われた飲み会、全部行ってやろう」と実行しました。飲んべえは、飲んでる時の約束は絶対。逆にお茶してる時なんかはそうでもないんですが(笑)。

蔵の前のバス停留小屋。変わらない原風景。変わったのは人が減ったこと。

馬場市長：なるほど。まずは天草の人脈をしっかりと築いていこうということですね。

平下：はい。そして2つめは、呼び込みとおもてなしです。東京での試飲会などでは、多い時は100人くらいと名刺交換する訳ですが、そこまでの人数になるとさすがに顔と名前は一致しません。試飲会なのに焼酎の話もそこそこに、9割くらいはもう「天草がいかに良い所か」という話をするんです。そすと、10人に一人くらいは本当に天草に来てくれるんです。そうなると完全に顔と名前が一致する訳です。そして、天草酒造で一緒に飲む。街（本渡）でまた飲む。「3時間空いてる？　じゃあこの海に行きなっせ」って。コーディネーターですよね(笑)。先ほど述べた、飲み会で築き上げてきた横の繋がりの人脈も駆使して、とにかく楽しんでもらえるよう全力でサポートをします。結果、来てくれた人は「天草最高！」となる。太い繋がりになっていくんです。酒販店の方なら、それこそ営業せずとも取扱いし続けてくださいますし、仕事の繋がりでなくとも毎年遊びに来てくれる方もいらっしゃいます。

そのようにして「とにかく天草に人を呼び込むことが大事」だと思い至り、そのためには「天草酒造だけで売っていくよりも、天草全体で」と考えるようになりました。そして、「焼酎を売ることは、天草を売ること」というのが理念のようになり、経営がぶれなくなりました。儲かる儲からないよりも、「それが天草のためになるかどうか」を基準にすべてを考えています。

会社も学ぶ、みがくその意欲がだいじ

——お二人で天草の将来を語りあうようなことってあったのでしょうか？

馬場市長：ええ、ありましたよ。

平下：僕らもラジオなんかだとあんな感じでしたが、真面目な話が中心のほうが本当はやりやすいんです。地域への思いや、未来像なんかもありますし。

馬場市長：そういうのを知っていたから、安心して任せることができたんですよね。

平下：私たちの世代って、みんな中学から高校くらいのとき、銀天街に人が沢山いてっていう天草の良い時代を知っているので、年代の近い人と飲んでいると、「天草こんなものじゃない！」という話にもなるんです。でも私たち世代より10歳以上若い方になるとそういう風景を知らない世代になってきます。彼らにとっては「活気でにぎわう天草」というのが想像つづらいのも無理はありませんよね。

そして天草の仲間と飲んでいてよく話すのは「天草が盛り上がる＝天草の企業にも恩恵がある」ということ。そうした思いを共にする仲間が増えてきているんです。

馬場市長：それは嬉しいですね。一方で、そこを企業だけでやっていくのにも限界があると思います。私も経営者でしたが、親から会社を継いだころ、経営状況は非常に厳しかった。倒産してもおかしくないほどでした。そんな中で必死にどうにかやってきた訳ですが、痛感したのはやはり平下さんと同じように「結局天草全体が良くならないといけない」ということでした。

平下：本当に仰る通りですね。あとは、次の時代に「魅力的な会社」である状態で繋いでいきたいと思っています。私も父からそのように継がせてもらった。天草酒造はもちろん、天草全体もそうしていきたい。我々世代が食い散らかして終わるのではなく、次の世代でも収穫が続くように、種まきもしっかりして、繋いでいきたい。

——お二人に伺います。天草の企業にとっての課題と将来像についてどのようにお考えでしょうか？

馬場市長：天草に限った話ではないですが、地方では多くの企業で人材不足が叫ばれています。その大きな原因のひとつは働き手にここで働きたい！」と思わせる会社がまだまだ少ないからではないでしょうか。これは自身にも戒めを込めて、ですが。

若い人が働きたいと思える会社や職業がないから都市部に出て行ってしまう。彼からすれば「帰っても仕事無いじゃん」と。そのためには彼らが「働きたい！」と思える企業になっていくことが大事です。社員のこと、その家族のことを考えて、幸せくらしを送ることができるように、会社を良くしていくということです。ですので、企業が社会情勢を知って、学んで、そうやって会社をみがき上げていく。この意欲はとても大事なのではないでしょうか。

——「学びながら、会社をみがき上げる」って素敵だと感じます。

平下：ちょうど先日講師側で参加させていただきました。

馬場市長：そうでしたね。今十数名が第一期生として学んでいます。第二創業期というか、後継者として経営を学ぶ方を中心に現在進行中です。

——後継者不足や事業承継も地方の企業の課題ですよね。

平下：立場が人を作ると思っているので、担い手がいるのであれば継ぐのは少しでも早い方が良いと私は考えています。

馬場市長：私も平下さんも35歳で親から経営を引き継ぎましたが、親から何か指示を受けるようなことはありませんでした。最初は相談さえしなかったら、周りの人から言われました。親父さんが「相談がない」と言っていたよって。それからは、相談はするようになりましたね(笑)。平下さんはどうでしたか？

平下：私も同じようなことがありました。相談もせずに新しい焼酎を造っていたんです。そしたら父が「せめて出来上がりくらい飲ませろ」と。そりゃあこもっともですよね(笑)。うちの父の場合は祖父からの継承が大変だったんですよ。なかなか思うようなタイミングで継がせてもらえずに。だからそれを父は反面教師にしたのかもしれません。今思うとちょっと不思議です。私たちの時代の父親っていわゆる昭和の親父。要するにめっちゃ厳しかったの。

馬場市長：私も全く同じでした。

平下：そんな厳しい父親が外で飲んでる日は、私たちは当然のように帰ってくるのを待つんですが、いつも厳しく恐い父が、帰ってくると朗らかになっている。子どものころは、そういうお酒の良い部分しか見てこなかったのは、今思うと良かったなと思いますね。

ピンチはチャンス？農業のこれから

——農業についてもお尋ねします。企業も行政も、耕作放棄地・ICT化・後継者問題などといった農業周辺の課題を共有していると思いますが、これからについてどのように考えていますか？

馬場市長：市民の皆さんと対話すると「次産業をどうするのか」というテーマは多く上がります。人口減と少子高齢化は簡単に解決出来る事ではありませんが、人が生きるために農業は守って行かねばなりません。そして日本では人口減の一方で、世界の人口は増えています。世界的に見ると土地を開墾し農地を整備していく流れではある訳です。ですから日本の耕作放棄地問題は、世界で見れば課題解決の好事例として逆にチャンスにもなり得ます。行政としてはそこをまとめてやっていかなきゃならないと思っています。

そして担い手不足に関して。そもそも生活出来ない仕事というのは誰もやりたくありませんよね。幸せに生活していくだけの収入が、第一次産業でも成立するのが大事。ここにも挑戦していきます。

平下：豊作だと価格が下がってしまうという農業のジレンマってありますよね。それで困って自分で売るにも売り方が分からないと農家さんも多い。現代の農業では経営の素養が必要だと感じます。

馬場市長：例えば農業も漁業もこれからは、一定の量は輸出していくのは可能性としてはあるのではないでしょうか。海外で売った方が高いというものもかなりある。一方で、これから天草への来訪者が増えていった時には、「天草でしか食べられない」ものが、沢山あるのも大事ですよね。国外・国内、両方での価値をあげていくという視点ですね。

平下：私たちも焼酎の原材料の米や芋を耕作しています。「倍の値段であっても、天草産の芋」というような品質の農業を成り立たせていきたいと考えています。美味しい焼酎づくりには、原料は大事です。それが天草産のよいものであれば、それは観光資源にもなります。

どういう事かと言いますと、例えば、オンライン化が加速し「東京にわざわざ居なくとも」という時代になり、田舎の良さが再認識されつつあります。オンラインでの蔵見学や、天草の魅力発信をするような機会も増えてきました。そうした時に、焼酎づくりへのこだわりが、農業へのこだわりや風土と結びついてストーリーになってくるわけです。つまり私たちにとっての焼酎づくりは、製造業であり、観光業であり、農業でもあるんです。

天草酒造の芋畑。新和町の耕作放棄地活用も今後検討していきます。

みなさん、天草は良くなりますか？

——市長の思う天草の一番の課題は何でしょうか。

馬場市長：市民の皆さんに「もっと天草に自信を持ってもらうこと」だと思っています。田舎で何も無い、少子高齢化、という所でポジティブになれない方が多くいます。

平下：都市部に出ている子どもに、親御さんが「帰ってこない方が良いと言っている」というような話を聞きます。でも私は、帰ってきたほうが良いでしょう」って思うんです。

馬場市長：親の言葉の重みってありますよね。私はいつも懇談会などで市民の方などと対話する際に冒頭で聞くようにしているんです。「天草が良くなっていくと思う方、手を上げてみてください」と。そうすると、大体ゼロとか1～2人なんです。そこでいつも自分の中で「皆さんに同じ質問をしてもっと手を上げてもらうこと」を目標に1時間話をします。結果、最後にもう一回同じ質問をすると、半分以上は手が上がるようになる。それだけでも、私の仕事として大事なことだと思っています。

平下：私も天草ほど良い所はないと思っています。KANPAI AMAKUSAも「東京に営業しに行かない」の宣言みたいなつもりで作った場所なんです。その代わりに、天草に来て頂けたら思いっきりおもてなしする。そのために、